

こんな してきます。

わだいのじかん

数と質

「限界集落に関する論争がまたにぎやかになってきました。限界集落とは、65歳以上の高齢者が50%以上を占め、地域での共同作業ができないなど集落維持が困難になることを示す概念として、1990年代の初めに高知大学の社会学者の先生が示したものです。その後、国土交通省が、今後10年間に高齢化が進み消滅する可能性のある集落が2643(全国集落調査、2006年)と発表し、「限界集落」の言葉はセンセーショナルにマスコミにも取り上げられ

ていきました。全国で過疎高齢化が進行し、地域産業の衰退や孤立集落など多様な問題が心配され、政府も地域の自治体も、集落の人口減が見過(せ)せない問題になってきていたからです。

高齢化集落は、そのまま年齢を重ね、超高齢集落となっていくしましたが、その間、画期的な解決策はありませんでした。そして昨年、とどめを刺すように登場したのが「増田レポート」。元総務大臣の増田寛也氏が子を産む世代である若い女性の人口動態に注目し、出生率との関係から2040年までに全国

争論集落限界



農家の方に学ぶ

自治体の約半数である89.6の自治体が消滅する」と予測しました。政策の中核にいた方の論説だけに、この「地方消滅論」は、政治家や大学人などがこぞって引用し、言葉は適切ではありませんが、大ヒットしました。

これに対し、地道にフィールド調査をしてきた研究者らから反論が出てきました。「地域は消滅しない」といっています。地域は、高齢化、限界、消滅に至るといって、ダムや自然災害による移転、高度経済成長期に皆で村を出た山村の家や大学人などがこぞって引用し、言葉は適切ではありませんが、大ヒットしました。

「高齢化のためだけに消滅した集落は見あたらない」とし、地域に新しく入って来る若者や、地域資源を活用した新しい生業おこしの事例を挙げています。たしかに、私たちが高齢化四十数%にもなる和歌山県の超高齢山村を調査しますが、地産地消に近い生業と助け合って暮らす生活スタイルで「しぶとく生きていく」のが現実です。この生命力の前に地域の存続とは何か、いつも考えます。先の論争の違いは、人口データを背景にした「数」と暮らし方に焦点を当てた「質」の問題の違いでしょう。しかし、数は質を保証しないし、質は数を保証しないのです。若い人口が集中している都会では、田舎よりも少子化が深刻だし、暮らしの質を求めて田舎に移住した層も、まだまだ非力と言わざるを得ないからです。



溝掘り

「すげえ」の実感

こうした論争に引き寄せられ、地域で勉強会を繰返す動きもありますが、なかなか特効薬はありません。その中で可能性があると思うのは、やはり若者です。先日も農業実習の授業で、15名の学生が水路の溝掘りを行いました。深さ60センチ、長さ20メートルほどをスコップで掘り続ける、単純な土との格闘。しかし学生たちは、田と水路の関係、先人の苦労、肉体労働の爽快さに感動し、深い土の底から現れた過去の石組みの水路跡に「すげえ」と感嘆の声を上げました。先人の労働と現在の若者の労働がクロスした瞬間です。

若者の人材育成、とは耳にタコ(ほど)も聞きますが、労働と先人の「すげえ」を実感することが「地域にしぶとく生きる」ことの源泉ではないか。限界集落論争にとって「残された時間は少ない」けれど、この「すげえ」の実感からやり直すのが遠いけれど近道なのかもしれません。

プロフィール



湯崎真梨子(ゆざき まりこ)
和歌山大学産学連携・研究支援センター 教授
専門は、農村社会学、地域再生学。自らが研究するだけでなく、地域と大学が共に成長するプロジェクト研究をコーディネートしている。